

第44号 50円

昭和51年9月25日

内容

神話・・・など.....1
 心なごむオープン・ハウス.....2
 開館十周年記念お祝い募金報告...4
 千人会報告.....5
 第84回大学共同セミナー.....6
 第4回八大学合同セミナー.....7
 4人の証言.....8,9
 第10回会員校事務連絡会.....10
 館長日記から.....11
 業務通信.....10 利用状況.....11

セミナー・ハウス
SEMINAR HOUSE NEWS

発行

財団法人 大学セミナー・ハウス

〈所在地〉

東京都八王子市下柚木

(〒192-03)

電話 0426-76-8511~3

振替口座 東京 74590番

〈東京事務所〉

東京都中央区日本橋本町3-3

三井銀行本町支店ビル5階

電話 東京 (241) 3961

編集・発行人 飯田宗一郎

製作 中央公論事業出版

やがて十年ほどにもなるであろうか、アメリカ東部の大学生活を描いたE・シーガルの「LOVE・STORY」が一寸した話題の種となったのは、舞台の背景とされたハーバードの学生らば、諷刺雑誌「LAMPON」のアンケートによれば、この没知性的センチメンタリズムの小説を「年間の最愚劣作品」第一位に選んだという。これは仲々そう簡単には得られない評価であって、そのおかげであろうか、やがて映画化された。「ある愛の詩」という題で日本でも上映されたのをまだ憶えておられる方もあるかもしれない。

物語の主人公は恋しあう男女二人の学生であるといえ、もう種は尽きる。二人は卒業する時がやってくる、男は結婚しようという、女は、馬鹿なことを言っただけでいい、カレッジの中であつたことは皆ぜんぶ神話におかねばならない、だから二人の間はこれでおしまいにしておきましょう、という。しかし結局、男の主張が上位を占め、二人は神話の世界を現実生活にまで延長しようと懸命の努力をする、しかしその過程も、まことに悲劇的な終結も、なぜか一世代もあるいはそれ以上もずれているという印象が、現実感に乏しい。つまり何処まで行っても二人の男女は「神話」の世界に留まったまま脱出できない。

作者シーガルの諷刺のきいた筆致に弄ばれた本場の素材学生たち

が腹を立て一矢返上したことは決してわるくない。この感傷的な話の運びを柔らかなアイロニーで包みこんでいる「カレッジは神話だ」という基本的な前提が、作者側にも素材者側にも、話の筋の外側にある問題として諒解されていると思われるからである。つまり人生の、最も感受性に富み、知性も肉体も最高の伸張度に恵まれた数年のあいだを、「神話」と呼ばれる別次元の世界に遊ばせること



神話・・・など

東京大学教授

久保正彰

義が、陳腐な学生恋愛においてのみ認められるようになってしまったのか、と作者は問い、「ランプーン」の読者は「最愚劣」と答えている。大学の外ではベトナム戦争、内では専門教育最優先が唱えられた時代であった。

人生に「神話時代」の一コマが許されるのは、或いは富裕特権階級だけのことも知れない。或いは成熟した資本主義社会の蓄積された古い富のみが、次の世代に許容しうるゆるやかな成熟の余裕で

あるのかも知れない。単なる理屈としては、その夢はプラトンの昔から見ればぬものであり、かのルソーも、近世ブルジョワジーの冠たる代言者ゲーテもかの教育理想境の画像をつうじて私たちに垣間みることを許している。「魔の山」も「ガラス玉遊び」も、その夢を忘れることの出来なかつた人々の証言である。また、いみじくも「迷路」という神話の題名を冠せられた青年の彷徨記も、主人公が

代」への提唱が声を大にしてなされねばならぬと思われるような、慄然たる情況が識者によって指摘されている。幾千年の英知を海のようにたたえる中に、身も心も深く沈めてわれを忘れて幾年かの時をすごすなどという、ぜいたくな人生の時が、誰に許されていようか。いや、そのようにしてのみ叶えられる人生の「神話時代」への郷愁を口にすることすら愚かと、教育の制度からは抹殺され、忘れ去られようとしているのである。とはいえ、教育の諸制度をまたぞろいじくりまわして改善される事態ではないことも、私たちは知っている。

しかし神話や夢のような人生の一コマをもつことが、求めれば垣間みることも可能であるということ、私たちが大学セミナー・ハウスで経験することができた。これまでにもこの共同セミナーの企ての驚くべき成果と成功については幾度かの讃辞が呈せられてきたに違いない。今さら私ごときがという心のひるみを幾重にも感じながらもやはり、この八王子の山の上にて期せずして見いだすことのできた「神話時代」の鮮やかな一面を綴り、飯田館長、職員の方々、「神話・文学・聖書」の企画委員の各位の御尽力にたいする感謝の一端とさせて頂きたい次第である。

(第84回大学共同セミナー 指導教授)

したたる緑の丘で茶を点てる 心なごむオープン・ハウス

昭和51年6月13日

千人会員を主客として

◆ 遠来荘初釜の茶会は
鮎川宗藤師匠門下の点前で

◆ 小学校教育を語る座談会は
子安美知子教授の話題から

梅雨期であったから天候が何よりの心配であった。数日来の雨もどうやら小休止の状態で、終りに近づいた時刻になって小雨が降り出した。家族づれ、一六三名の参加者が緑の中で数々の交歓風景をつくった。

今回の行事は、大学人の連帯と千人会員の善意に対する感謝の表明として計画されたものである。具体的には開館十周年お祝い募金に寄せられた寄付金のお蔭で、このように立派な設備が揃いましたという報告書の一部をなすものである。それを一片の報告に終らせないで、遠来荘の茶室開きを行い、併せて教育環境にふさわしく、小学校教育を考える父母達の研修会を催したのである。さらに大学教授として、「わが父」が利用しているセミナー・ハウスに「わが妻」と「わが子」を招き、いわば家族ぐるみでセミナー・ハウスの生活

をたのしみながら体験していただくという第三の目的があった。そのことは、hospitality (親切にもてなすこと)、good-will (喜んですること)、softness (静かに優しいこと) という三つの要素を、セミナー・ハウスの雰囲気づくりの礼法としたいという館長の日頃の念願によるものである。

十年前に、この構内に茶室が建ち、お茶会が催されることを、誰れが予想したでしょうか。遠来荘と命名した多摩の民家は、セミナー・ハウスの建物群にやすらぎを与えた。セミナー参加者が一息入れる余裕をつくる場所である。

◆ 第一場 遠来荘の茶会 (二～五時)

遠来荘の玄関前植込み、竹垣、灯籠などが日本庭園らしい風景をつくっている。屋内では紫色の幔幕が張られ、美しい生花が飾られ



生花の展示と煎茶の手前

た客室に招き入れられたお客様の和服がなごやかな情景をつくっていた。鮎川先生始め、田中、大沢、中宿、浅野、鶴飼、森本などご婦人方が力作を展示して下さったお蔭で生花の美しさがお茶会の雰囲気清々しいものにしていただ。これみな鮎川先生の趣向である。緋毛氈の上でしずしずとさばかれるお点前が茶会を盛りあげてくれた。民家を改造した茶室には山内恭彦先生がご寄贈下さった海北友松の李白観瀑図がかげられ、雄大高尚の気風をかもし出している。友松は桃山時代の水墨画家である。数ある茶道具の中で、加藤六美先生のご寄贈になる指物師松斎の作、桑を材料にした風炉先が名品というべきか。茶碗、水指、菓子器など加藤先生の陶作品はこれから遠来荘で開かれる茶会ごと

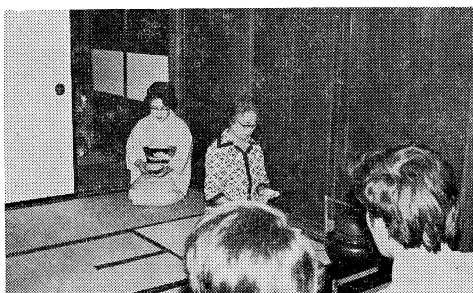
に多くの茶人から賞翫されるであろう。今回の茶会では、お茶会が催されることを、誰れが予想したでしょうか。遠来荘と命名した多摩の民家は、セミナー・ハウスの建物群にやすらぎを与えた。セミナー参加者が一息入れる余裕をつくる場所である。

う。今回の茶室開きを実現させて下さった数々の好意の中で、しんじゆく一色が茶器店として寄せられた御援助と千人会員佐藤頌子・力夫妻のご寄贈になる多数の茶道具があったことを特記しておかなければならない。

来訪されたお客様は一六三名であった。その中には御夫人があり、子女達が含まれていた。家族づれでこんなに沢山の人がこの丘に集まったことは十年のうちになかったことである。子ども達のために臨時に託児所を設けたというものはほえましい風景であった。お客様にも茶人が多く、茅誠司先生の奥様伊登子夫人、一橋大学名誉教授板垣一、山田勇両先生の奥様など、お点前を披露され、結構なお茶をいただくことができた。矢内宗紫先生ご指導の相模女子大学の茶道部の諸嬢が今回の茶会の主役を果たされた。和服姿の彼女達がおりなす茶の作法を心から満喫した半日であった。

◆ 第二場 大学院セミナー館の座談会 (二～四時)

教育に関心を持つ参加者約五〇名。発題講演は、最近発行された中公新書「ミュンヘンの小学生」の著者子安美知子早大教授で、お嬢さんのフミさんをシュタイナー学校に入学させた実際の体験を土台に、手芸、工作を重視して頭脳の働きを活発にし、集中力を育て



茅伊登子夫人のお点前 (左は矢内宗紫夫人)

る小学校一年や、書くエポック、算数エポックなど四～六週間を一つの科目だけを教えて、他の分野は休ませるエポック方式のカリキュラムなどお嬢さんの持ち帰ったノートを示しながら興味深くドイツにおける特色ある科学教育を紹介された。

◆ 第三場 本館食堂

昼食とき、正田理事長ご夫妻が早々とお顔を見せられる。それにつづくのは、お孫さんをひきつれた石川肇東大教授ご夫妻である。今日は家内をつれて来ましたといわれる一橋大学名誉教授板垣一先生は、一橋の同僚山田勇名誉教授ご夫妻をもおつれ下さった。ミュンヘン以来の再会を喜ぶ示村悦

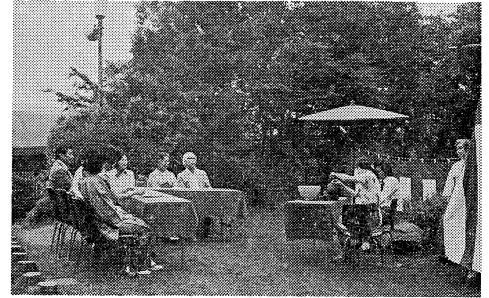
二郎早大教授と子安宣邦・美知子教授の両ファミリー等、日頃は若者ばかりの食堂が今日ばかりは家族食堂になった。うるわしい風景である。飯田館長は各テーブルを廻って挨拶され接待につとめた。

その他は柴垣和三雄、堀川浩甫、加藤栄一、大須賀節雄、三村卓雄、岩浅武雄、堀野定雄、吉田光孝、奥山典生の諸先生が御夫人と、またはお子さんとお孫さんをつれられ、老年、中年、若年の各層に及んだが、十年の間にセミナー・ハウスはこのような家族的連帯をつくっていたのである。

◆第四場 野だて

—— 出合いの丘 (二〜四時)

一橋大学茶道部の学生諸君による野外の茶会である。当セミナー・ハウスの構内には野点とするに格好の場所があちこちにある。一寸考えると行いやすいようであるが、あたりの景色に目を奪われがちであるから、茶会の雰囲気のでにくいものである。野点用の朱の大きな傘が緑の中に一段とさえる。



野点風景 (一橋大茶道部による)

ている。

一人二人と腰を掛ける素人も心得ある人の中にまじって簡略化されたお茶の道をたしなんでいた。お替りを求めるお客もあり、半東さんも手際よくサービズしておられた。茶室にない軽さがただよっていた。茶室から出て、野外を散歩しながら自然の中で、また一服のお薄をいただき休息するという亭主の心の深をしのんで下さったお客は何人あったでしょうか。

◆第五場 清酒の緑蔭コーナー——中央庭園 (四〜五時)

お茶よりはお酒というお客のことを考えた亭主の思いやりである。これも茶道のたしなみか。意外に好評で、時ならぬうれしい光景をつくっていた。夕刻小雨の中で去り難く杯をくみかわっていたのは東大農学部岩崎代志治先生とその学生群であった。

◆第六場 野外託児所

—— ようこそ広場

茶室にも座談会にも幼児は向きである。広い遊び場にはことかない場所がある。子どもは野外で遊び、親は茶の湯三昧にすごし、わが子の教育を思う座談会に出席するなど多彩なプログラムが組まれていた。女子職員とお姉さんの奉仕で、子ども達は歌い、踊り、走り、食べながら、無縁の子どもが、友だちとなっていた。

◆第七場 本館食堂の屋台 (四〜五時半)

—— 腹ごしらえをして帰路について

「多摩のそば」のこちそうである。すばらしく好評で夕刻の空腹をみたしたようである。親子づれのグループがあちこちのテーブルで、今日の出来事を話題にしている。神奈川大学の堀野助教授の坊っちゃん、ザリガニのえさにミミズ

を捕ったといっていたが、これが何よりの収穫だったらしい。自然とは子どもにそのような経験をさせるころである。

おわりに

人間社会にかかせないことはお客をもてなすことである。亭主は心から客を敬い、客は亭主の心を有り難く受け入れる。今回の遠来荘の茶会は茶室の中で数時間ひざつき合わせて過ごすような茶事ではなく、薄茶、服の茶会であったが、大学院セミナー館での教育を語り合う座談会もそばの屋台もまた茶事のうちであるとすれば、一服の茶を中心におき、食事を伴い、自由に会話をかわし、名残りを惜しみながら過ごすという一期一会の正式の茶会というべきか。

茶会の指南役を果たされた「鮎川老婆宗匠」に対するお礼をこめてこのニュースの記事を贈りたい。これもまた茶事の後礼というべきか。

遠来荘茶室のため寄贈された茶道具および寄贈者は左の通りである。ご好意に感謝し、大切に長く使わせていただきます。またこれらの道具類は、茶室利用者にお貸しします。どうぞ遠来荘で茶会、句会などにご利用下さい。

一、掛軸 海北友松作「李白観瀑図」

日本学士院会員・顧問 山内恭彦殿

一、自作点出し茶碗 山内恭彦殿

一、指物師松杵作風炉先(桑材)

一、自作水指(灰釉流れ共蓋) 前東京工科大学長 加藤六美殿

一、菓子器(作者不詳)

一、琉球風炉釜 川辺地龍作一揃

一、炉釜 佐藤旺光作一口 榎しんじゅく一色殿

一、茶碗 陽山四君子 一個

一、水指(小) 染付アイ色 一個

一、濃茶器 おしふく付 一個

一、なつめ 黒地紙 一個

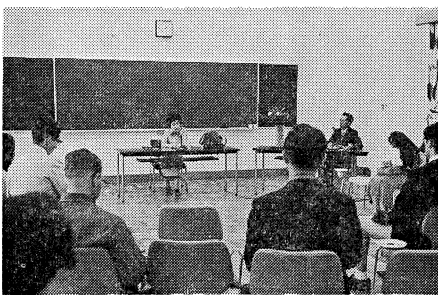
一、建水 織部 一個

一、色社員 佐藤 力殿
千人会員 佐藤 頌子殿
一、カイゲ、水こし 各一個
一、水ガメ、茶巾ダライ 各一個
茶道師匠 鮎川宗藤殿
同 矢内宗紫殿

●開館11年目の朗報
会員校ついに五〇大学

本年度は、鶴見大学・駒沢大学の入会申込を認める

43号において本年度は東海大学、東京農業大学が入会され、会員校が48大学になったことを報告したが、その後前記の二大学を会員校に迎えた。これで昭



子安美知子教授のお話

開館十周年記念お祝い募金(目標三〇〇万円) 報告 第四報

累計 二五八万五、〇四六円 (7月31日現在)



松下館(教師館)に大型の温水機が設備された。暑い時節にいつでもシャワーがあげられるように改善されたのもこのお祝い募金による寄付である。

(右の写真参照)

▼主なる支出・購入物品

【お礼とご報告】

十年たつて、御用済みになった物品の代わりにお蔭さまで、新しく器具機械、什器類が整いました。利用者の便宜に供しております。いづれ詳しく会計報告しますが、主なるものは次の通りです。

- 講堂映写機 六四六、〇〇〇円
大学院セミナー館机・椅子 三四九、〇〇〇円
遠来荘の茶道具類 三七七、四二〇円
遠来荘の庭園 二二七、九〇〇円
本館ラウンジのソファ一類 六五三、二五〇円

中央セミナー館椅子 三二〇、〇〇〇円

▼ご支援を感謝して 拝受いたしました

昭和51年6・7月分 金二四万二、九六〇円

五、〇〇〇円 成城大学教授

八、〇〇〇円 野口武徳殿

第83回共同セミナー指導教授

東京学芸大学助教授

宮田 登殿

駒沢大学教授 佐々木宏幹殿

明治大学教授 江守五夫殿

評論家 谷川健一殿

三、〇〇〇円 大月短期大学学長

三、〇〇〇円 成蹊大学教授

三、〇〇〇円 黒沼 稔殿

三、〇〇〇円 東京大学教授

二、〇〇〇円 今堀和友殿

二、〇〇〇円 青山学院大学教授

二、〇〇〇円 深沢 実殿

二、〇〇〇円 聖心女子大学教授

二、〇〇〇円 岡 宏子殿

一〇、〇〇〇円 東京八王子西

九、五〇〇円 ロータークラブ殿

九、五〇〇円 第83回共同セミナー

五、〇〇〇円 参加者一同殿

五、〇〇〇円 東洋大学教授

五、〇〇〇円 白川和雄殿

五、〇〇〇円 東京女子大学職員

五、〇〇〇円 石田孝夫・優子殿

五、〇〇〇円 田中木工社長

二、〇〇〇円 田中昌文殿

二、〇〇〇円 サンニス・クリナー

五、〇〇〇円 代表者 関口 実殿

二、〇〇〇円 津田塾大学教授

一〇、〇〇〇円 佐野智恵殿

一〇、〇〇〇円 東京学芸大学学長

二、〇〇〇円 太田善磨殿

二、〇〇〇円 東京学芸大学教授

一〇、〇〇〇円 永野 賢殿

一〇、〇〇〇円 千葉商科大学教授

三、〇〇〇円 清水昌三殿

五、〇〇〇円 東京女子大学教授

二、〇〇〇円 清水 護殿

二、〇〇〇円 茶道・花道教授

二、〇〇〇円 鮎川宗藤殿

二、〇〇〇円 伯東惺願

一〇、六〇〇円 中村栄次殿

二、〇〇〇円 慶応義塾大学教授

二、〇〇〇円 村松 暎殿

二、〇〇〇円 榎早稲田奉仕園

三、〇〇〇円 布施濤雄殿

一〇、〇〇〇円 日本大学教授

一〇、〇〇〇円 栃原敏房殿

三、〇〇〇円 青山学院大学

三、〇〇〇円 佐藤和男教授ゼミ殿

三、〇〇〇円 東京都立大学教授

三、〇〇〇円 桐敷真次郎殿

三、〇〇〇円 熊田達子殿

六、〇〇〇円 東京大学助教授 有賀 弘殿

一〇、〇〇〇円 日本大学教授 瀨在良男殿

一〇、〇〇〇円 お茶の水女子大学教授 吉松藤子殿

四、〇〇〇円 中央大学教授 山下幸夫殿

五、〇〇〇円 専修大学教授 大河内正陽殿

三、〇〇〇円 東京大学教授 小林直樹殿

一、〇〇〇円 芝浦工業大学建築学科 学生一同殿

一〇、〇〇〇円 杉野女子大学教授 田村皖司殿

一〇、〇〇〇円 東京理科大学 大沢綱一郎教授ゼミ殿

三、〇〇〇円 熊田達子殿

三、〇〇〇円 早稲田大学教育学部 教育学演習一E殿

三、〇〇〇円 旧職員 土田美芳殿

一〇、〇〇〇円 商業英語出版社社長 尾崎 茂殿

七、〇〇〇円 八大学合同セミナー 教員有志殿

三、〇〇〇円 共立女子短期大学教授 青山誠子殿

三、〇〇〇円 国立教会 聖歌隊殿

三、〇〇〇円 八大学合同セミナー 参加者殿

一、〇〇〇円 青山学院大学教授 原 豊殿

三、〇〇〇円 中央大学教授 玉田啓八殿

六、八〇〇円 募金箱より

寄付金報告 昭和51年7月現在

▲一般寄付金▼ 一〇、〇〇〇円 大学英语教育学会殿

五、〇〇〇円 衆議院議員 宇都宮徳馬殿

一〇、〇〇〇円 ▲植樹基金▼ 衆議院議員 宇都宮徳馬殿

一〇、〇〇〇円 日本小児神経学研究会 第五回小児神経学セミナー受講者一同殿

三、〇〇〇円 産業能率短期大学 通信教育課程学生一同殿

三、六〇〇円 芝浦工業大学 建築学科一同殿

一〇、〇〇〇円 千葉商科大学殿

一〇、〇〇〇円 鑄物煙草セット 職員 小柳たか殿

いちょう一本 職員 海老沢義道殿

きんもくせい一本 雪印社員 浅田麻弥子殿

遠来荘茶室にご寄稿下さった分

については3頁に掲載

千人会——会員増加運動——第四報——昭和51年6~7月

◇現在会員は、二八六名です

大学人 一、〇一三名
社会人 二、七三三名
(51年7月末現在)

◇新しく会員となられた方々

A 31名(第33回報告(申込順))
本法人事務局長 海老沢義道殿

B 三井銀行専務取締役 関 正彦殿

C 早稲田大助教授 片山 寛殿

B 北里大学助教授 岩内亮一殿

A 工学院大学助教授 平川紀一殿

C 東邦大学助教授 赤堀禎利殿

C 亜細亜大学助教授 山田 勇殿

C 主婦(鮎川門下) 浅野明子殿

C 主婦(鮎川門下) 田中恵美子殿

C 主婦(鮎川門下) 増谷和子殿

C 茶華道教授 大沢芳子殿

C 茶道教授 中宿千枝子殿

C 茶道教授 鶴飼淑子殿

C 大韓航空(鮎川門下) 森本智津子殿

A 東京八王子国際ロータリー・クラブ幹事 大貫 一殿

C 東京大助教授 後藤光一郎殿

C 東京学芸大学助教授 松崎奈岐殿

B 東京学芸大助手 佐久間徹殿

B 日本女子大教授 奥田夏子殿

B 日本女子大教授 島美喜子殿

A 日本女子大教授 青木生子殿

終身 城西大学 匿名殿

C 学習院大学教授 小松茂夫殿
B 東京学芸大教授 小林 弘殿
C 東京学芸大講師 足立美比古殿

C 東京学芸大教授 山鹿誠次殿

C 文京大学教授 山口貞雄殿

B 東京女子大学教授 高村多賀子殿

C 慶応義塾大学助教授 小池生夫殿

C 駒沢大学教授 寺中良二殿

C 駒沢大学講師 石井修二殿

◇会費ありがとうございました

昭和51年6~7月(敬称略)

大村晴雄、荒川有史、小島守生、今堀和友、江沢洋、石川孝夫、長岩寛、松井源吾、古畑和孝、藤井耕一、柴田恭二、高橋康之、中島正、河井義博、高橋忠次郎、朝野洋一、岡本栄一、佐藤進、三浦徳弘、榊原繁雄、中嶋嶺雄、川名明道、道喜美代、竹内喜夫、徳末安伊子、和田英一、福山直美、大畑篤四郎、篠原泰三、岩橋宜隆、前田護郎、秀村欣二、藤野登、村井孝子、望月継治、中村幸安、奥野忠一、佐竹寛、奥村敏恵、宅間宏、上野芳夫、柳田博明、名東孝二、岡田正弘、犬井鉄郎、西川治、長清子、嶺哲之助、栗林恒雄、栃原敏房、見田宗介、山本襄治、北野美枝子、太田正孝、川島順平、吉田幸弘、和歌森太郎、金子晃、山本幹夫、

芹沢栄、合田周平、朱牟田夏雄、大野泰雄、佐古純一郎、高橋勇悦、熊田陽一郎、大沢芳子、中宿千枝子、鶴飼淑子、海老沢義道、川喜田二郎、梶国男、岡広子、宗像元介、白澤富一郎、堀野定雄、千葉岑雄、平川紀一、赤堀禎利、藤永素美子、森本智津子、布施壽雄、吉松藤子、武者利光、笠松章、太田秀通、川田侃、青木郁朗、飯田憲治、島海俊宏、西嶋定生、臼井久和、平山美枝子、小倉安之、松尾浩也、土方保、有賀弘、芝川栄三、川田雄一、高柳暁、小倉充夫、片岡清子、中山昌、鈴木務、石川信男、柴田政利、柏木恵子、中村哲哉、黒田道雄、市井三郎、林俊一、中村敏昭、安宅光雄、石井進、郡司正志、三橋文雄、笹森健、内山尚三、辻達也、関野昭一、三和治、高島善哉、金丸重嶺、安藤良雄、中川作一、出渕博、松原治郎、福田敏一、田島恵治、和田義信、小川信子、尾崎茂、石川馨、千住鎮雄、高橋公雄、藤平重雄、松島恵、山本尚志、高山旭、宮川俊彦、佐藤誠三郎、河田敬義、小池滋、鳥居照男、厚東偉介、中村進、村田一也、小川圭治、後藤光一郎、奥田夏子、望月一憲、色川大吉、浅川淳、奥原唯弘、芥川竜男、三輪公忠、山西貞、山口重克、沢崎守孝、西村敏男、池宮英才、鶴見

和子、小松茂夫、佐野晃、土田美芳、藤原鎮男、小池生夫、寺中良二、石井修二、井上孝、松崎義徳、田中庄蔵、鈴木成文、角瀬保雄

寄贈図書

(昭和51年1~4月)

「コンゼ仏教—その教理と展開—」 横山紘一殿

「建築学大系 22」 内田祥哉殿

「政治と宗教倫理」 宮田光雄殿

「日本人の旅・雑考」 「絵の言葉」 エッソスタンダード石油広報部殿

「ヘーゲル再発見・再評価」 榊原敏房殿

「オーストラリア、ニュージーランド、太平洋地域の大学と学生相談」 「行動カウンセリング入門」 林 潔殿

「政治経済史学」 一一六 政治経済史学会殿

「混沌の海へ」 筑摩書房殿

「鎌倉本保元物語」 大井善寿殿

「知識と人間」 山内恭彦殿

「幼児教育組織論」 5冊 稲毛よしと殿

「日本史の虚像と実像」 和歌森太郎殿

「構成図—育子抄」 久保育子殿

「大橋広遺稿集」 遺稿集編纂会殿

「移動大学」 「雲と水と」 川喜田二郎殿

「組織の時代」 「近代の神話」 「西欧精神の探究」 木村尚三郎殿

「英米文学論集」 上代たの先生米寿記念

「武州八王子史の道草」 実行委員会殿

「英文法辞典」 清水 護殿

「古墳の設計」 梶 国男殿

「歴史と現在」 堀米庸三殿

「国民の経済白書」 川田 侃殿

「タイのこころ」 田中忠治殿

「西洋精神の源流と展開」 川島重成殿

「友情の人—鶴見祐輔先生」 鶴見和子殿

「大捜査3億円事件」 田中正人殿

「社会学論叢」 65 笠原正成殿

「国際交流」 8 国際交流基金殿

「Asian Culture」 12・13 ユネスコ・アジア文化センター殿

「大学研究ノート」 20・21 広島大学大学教育センター殿

「地方自治総点検論」 「関東都市学会年報」 1・2 黒沼 稔殿

「早稲田社会科学研究」 15 「早稲田人文自然科学研究」 13 「早稲田フォーラム」 12 早稲田大学殿

「総合教育研究室年報」 3 関西学院大学総合教育研究室殿

「インドネシアのこころ」 アリフィン・ベイ殿

「病者のこころの動き」 都留春夫殿

「東海大学短期大学紀要」 9 東海大学医療技術短大図書館殿

「国立大学入試改善調査研究報告書」 国立大学協会殿

「SSIジャーナル」 29 「SSI紀要」 7 早稲田大学システム科学研究所殿

第84回大学共同セミナー

主題——神話・文学・聖書

——西洋古典の人間理解——

期日——昭和51年6月18～20日

〈主題について〉

青山学院大学教授 秀村欣二氏
 〈全体講義とセクション演習〉
 A 叙事詩「オデュッセイア」の成立——

東京大学教授 久保正彰氏
 B ギリシャ悲劇「アイスキュロスの「オレスティア三部作」、特に「アガメムノン」を中心に——
 国際基督教大学助教

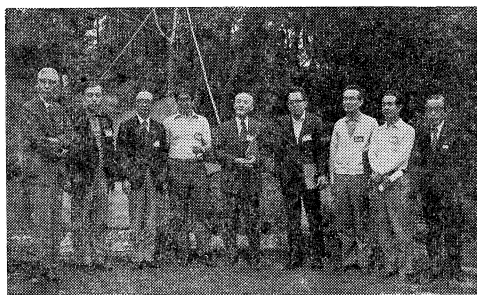
川島重成氏 (運営委員)
 C アウグストゥス時代のラテン文学
 順天堂大学教授 中山恒夫氏

D 古代オリエント神話・文学と旧約聖書

東京大学助教 後藤光一郎氏
 E イエスと福音書文学——「放蕩息子の譬」によせて——

東京大学教授 荒井 猷氏
 F パウロの人間理解
 新約聖書学研究者 佐竹 明氏
 〈参加学生〉109名(内女子79名)

津田塾大(16)、青学大、聖心女大(各12)、慶大(8)、ICU、早大(各7)、東大(6)、東女大、都留文科大(各5)、東外大、成蹊大、跡見学園女大、同志社女大(各3)、筑波大、学習院大、成城大、立大(各2)、一橋大、東京医歯大、電通大、都立大、独協大、上智大、中大、日大、東洋大、明学大、清泉女大(各1) 合計28校



左2人目から後藤,荒井,川島,秀村,佐竹,中山,久保の七氏

今回のセミナーは、若手の共同セミナー委員・川島重成先生が企画を担当され、運営・指導の両面において終始、精力的に取り組まれた。

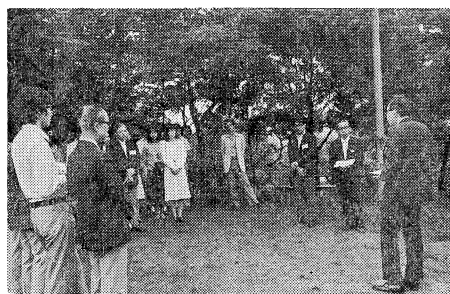
西洋文明の二大源流であるギリシャ・ローマ文明とヘブライ文明の源泉を人間理解に焦点をあて探ろうとするのが、このセミナーの目的である。ともすれば対立点が

強調され異質なものとされがちなこの二つの西洋古典世界を統一的に把握するため、セミナーの導入部として指導教授全員が連続して全体講義を行うという形式がとられた。

講師陣には、いずれも前田護郎、神田盾夫、秀村欣二の三長老教授と学問分野において深い関係のある新進気鋭で学殖豊かな六人の先生方が指導に当たられた。高輪の秀村先生が三日間、学生と起居を共にされ、このセミナーの校長先生の役割を果たされたことは、先生の学問と教育に対する情熱の現われとして、参加学生に深い感銘を与えた。

最終日に、佐竹先生の司会で朝の礼拝がもたれたのも、このセミナーならではの特別プログラムであった。朝食前の三十分であったが小鳥のさえずる出会の丘に、約二〇名が集い聖書のことばを学んだ。さすがにハイデルベルグ大学で専任牧師をされたご経験を持つ佐竹先生のメッセージは心を打つものがあつた。

指導教授全員の参加によるシンポジウムは、秀村先生の巧みな司会によって進められ、プログラム中の圧巻であった。われわれが古典を読み取るときには、その成立と伝承の過程でどのような人々が担ってきたかを明らかにすることが肝要であるとして、まず久保先生が、詩人と学者がつくり上げたものがギリシャ・ローマの古典で



朝の礼拝(右端は佐竹明氏)

さらに久保先生は、古代世界において運命として立ち現われる自然とは圧倒的な美しさで人間をおし込んでしまうものであり、人間がどんなにさがいても、それと争うことのできない美しさのエッセンスが自然ではなかったかと結ばれた。

古典世界の自然の美しさ、神々、運命、そして人間に遠く想いを馳せながら、三日間の密度の高いセミナーの幕は閉じられた。

●大学生生活のエッセンス

大 沢 晴 美

大学生生活のエッセンスがここにはある。私は三日間のあらゆる場面ですら感じた。

全体講義では、諸先生の興味深い古典への手引きとともに、あの快い緊張感が印象的だった。セクション演習では、問題を把握し自分の考えをまとめ質問や意見を発表することの難しさ、更にそれに対する応答を理解し問題を発展させていくことの難しさを痛感した。

しかし、そこでの先生や友人との出会いはかけがえのないものだった。先生の研究に傾ける情熱や地味な御努力の様は私達の良き刺激となったし、気さくに、また比喩的に語られた様々な話題は先生の生きざまの一端をのぞかせていたように思う。そして友人との交わりは名物ミッドナイト・セミナーで絶頂に達した。

次に川島先生は、古代世界においてはヘブライでもギリシャでも両者に共通なのは超越者に聞くという人間の態度であることを指摘し、中山先生が最高神ユピテルと運命との問題を新たに提出したことを受けて、ギリシャにおける運命とは結局自然の秩序につきるとし、運命と人間との対峙、そこに介在する神々が織りなす悲劇のなかで、この運命は人間をささげる否定的な力であると述べた。

講義や演習にも増して(?)楽しかったのは会食の時である。他のセクションの人と情報交換をしたりラッキーにも先生の隣になつて楽しくおしゃべりしたこともあった。食卓はきちんと配膳されて居り、細やかな心遣いが感じられた。美しい心から正しいマナーが生まれる、という館長先生の御言葉がここにも生きていると思つた。

講義・演習・出会い・語らい。

普段の大学生活では残念ながらごく緩慢にしか経験できないものがこのセミナーでは高い密度でしかも緊張をもつて迫ってきた。それだけに今はまだ未整理の部分、未消化の部分が残っている。それを噛み砕いて自分のものにする為になすべきことは沢山ある。今後の努力次第でこの三日間のセミナーの成果は三倍にも六倍にも十倍にも

なるだろう。そして幸いにも今後の課題への糸口と、多くの示唆とを私たちは既に得ている。

(青山学院大学史学科3年)

●古典に学んだ三日間

千 葉 恵

諸先生の真理愛が、このセミナーを密度濃き潑刺たるものにして下さつたように思われます。遠きオリエント、ユダヤ、ギリシャ・ローマの世界が身近かなものとなり、彼らの生への息吹きを肌を感じる事ができました。彼らの人生を学ぶことによつて多くのことを教えられました。彼らは人間の力を超える「実在」に常に直面していたということを感じたことが、何よりも大きな収穫でした。学びし古典の主人公たちは、絶対者の自覚ゆえに、謙遜にしかも大胆に自己の宿命を甘受し

つつ、ただ一度の生を、痛快に切れ味よく生きることができたのではないのでしょうか。

このセミナーで、真の学問は全く学問であることよつて生きることに関わる、ということをお教へていただきました。またよき真摯な友人を与えられました。夜を徹して語り明し、東の空が白みだすとセミナー室を出て胸一杯に朝

第4回八大学合同セミナー
自主ゼミの在り方を探ぐる

昭和51年7月23~25日

の澄んだ空気を吸い、新しく出会った仲間たちと、久保先生、川島先生を交えてテニスに興じたことも楽しい思い出になりました。

この尽きぬ感謝は、真理を愛し探求する人生を歩むことよつてのみ、はじめてこのセミナーを企画して下さつた方々への責めを果たすことになると思います。

(慶応義塾大学政治学科4年)

△大学共同セミナー開催予告▽

◎第86回 古代東アジア史上の日本

10月22~24日

△全体講義▽

東アジア史からみた「天皇」号の成立

東アジア世界と日本

△セクション演習▽

A 文化史からみた古代東アジア史上の日本

B 法制史からみた日本と中国

C 中国と日本の仏教受容

D 朝鮮史からみた古代東アジア史上の日本

E 解放後の中国における考古美術

— 広開土王碑をめぐって —

栗原朋信
西嶋定生

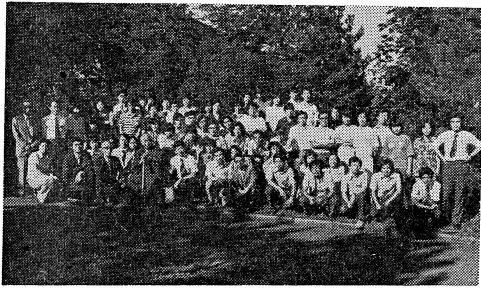
大谷光男
小林 宏

塩入良道
武田幸男

土居淑子

◎第87回 「宇宙」—現代宇宙像の諸問題

11月12~14日



宇都宮徳馬氏と八大学合同セミナーの参加者

従来、共同セミナーの一つとして開催されてきた八大学合同セミナーは今年で第4回目を迎えたが今回は当ハウスの手をはなれ、学生の自主ゼミとして実施された。実行委員会が編成されてから一年間、二〇回近くの勉強会を重ねな

がら準備を進めてきたもので、企画室が若干の補佐をした以外、大半は実行委員の手で運営された。講師陣は、第一回から連続、学生の面倒を見ておられる成蹊大学教授の宇野重昭先生が、今回も全期間指導に当たられたほか、この合同セミナーのOBを含む別記の指導者が交互に参加された。

ゲストには衆議院議員として異色の存在であられる宇都宮徳馬氏を迎え、約一時間半、現実政治家としての外交論を展開していただいた。同氏は学生の向学態度に好感を示され、予定を変更して夕食会にも出席され、身をもって大学セミナー・ハウスの雰囲気を経験されて多摩の丘をあとにされた。

開催期日が夏休みにかかったことにより、当初予定されていた講師の参加が実現できなかったこと、経費その他の諸事情によるI

CUの不参加で、八大学としながらも実質は七大学であったことなど、今後の課題を残しながらも、合同セミナーは過去から未来へと着実に継承されていくようであった。

□

■主題「現代の外交を考える」

— 両極化から多極化へ —

■ゲスト講演

衆議院議員 宇都宮徳馬氏

■セクション演習

〔日本〕 神奈川大学講師・増田弘氏 / 〔アメリカ〕 東京大学教授・渡辺昭夫氏 / 〔西欧〕 成蹊大学教授・村瀬興雄氏、一橋大学助手・南義清氏 / 〔共産主義〕 成蹊大学教授・宇野重昭氏 / 〔非同盟(民族解放)〕 世界経済情報サービス研究員・滝口太郎氏 / 〔非同盟(資源外交)〕 慶応義塾大学博士課程・井上勇一氏 / 〔セクション指導補佐〕 滝田賢治氏(一橋大)、後藤健生氏(慶応大)

■実行委員会

委員長・難波徳成(成蹊大)、副委員長・村上清士(一橋大)、同・山岸信行(明治大)、総務・荒木詩郎(成蹊大)、会計・西松逸子(津田塾大)、実行委員・並木功秀(慶応大)、西森庸子(上智大)、伊藤逸男(一橋大)、川上仁司(明治大)、山口康子(津田塾大)

■参加学生 (69名)
明治(21)、慶応(14)、成蹊(10)、聖心女子(9)、一橋(8)、津田塾(6)、上智(1)

4人の証言

利用者とともに

セミナー活動の拠点をつくる

開館十年の歴史は、大学の内外に新しい活動を促し、それらの諸活動を通じて、多くの常連の利用者を育てた歴史でもあった。

この6月、7月には、利用回数10回を記録したグループが二つあった。お茶の水女子大学新入生セミナーとJACET(大学英語教育学会)夏期セミナーがそれぞれである。ともに昭和42年から毎年一回開催されてきている。JACETセミナーの参加者は通算約二五〇名に及び、運営に当たってこれらた会員の先生方と職員はすっかり顔なじみとなり、「大学英語来らずして、夏は来ず」という合言葉も生まれている。



小川ベンチと記念植樹(右から2人目は小川芳男先生)

一方、川喜田二郎氏の率いる移動大学のように、七年前にこの丘の上で研究会を開催して以来、全国各地で活動を展開し、再び八王子に姿を現わしたグループもある。

1 十周年を迎えた JACET セミナー

大学英語教育学会 小池 生夫

大学セミナー・ハウスの図書館の斜向いの窪地に、「火を握る人」と題する詩碑があるのに気づく人は多いだろう。その隣りに大きく伸びた金木犀がある。これは、この丘に集う人々が残した木々の一つであり、このハウスでは見なれた風景の一つにすぎないが、私には特になつかしい思い出を残してくれている。この丘で開催された大学英語教育学会第1回夏期セミナーに私が参加したのは、昭和42年7月のことであった。この年は大学セミナー・ハウスができて二周年を迎える頃で、諸設備もまだ新しく、多くの人々の善意の象徴でもある記念植樹もまだまばらであった。三週間の寝食を共にしての参加者一同が、「丘を上る時には見知らぬ者同士であったが、丘をおりる時は、同じ釜の飯を食べ

る。また、新しいところでは、昨年引き続いて利用された計測自動制御学会がある。学生顔まけのバイタリティで白熱した研究報告が終日行われ、多くの学会利用の中でも、最もまじめな研究者集団というのが職員のかい間見た印象であった。

ここに、四人の方々から、それぞれの活動の一端と、当ハウスとの因縁とを語っていただくこととする。

あった共感しあえる仲間として去る」にあたり、残したのが、小さな金木犀であった。そして、それ以来、JACET セミナーが残した植樹は十本になる。そして、今年、それを記念して松下館前小径の途中に、小川ベンチが、飯田館長の御好意により設けられた。私たちの学会の会長である小川芳男東京外大名誉教授の姓をとってである。そのベンチの前で、十周年を祝ってお茶の会を開いていただいたのは、セミナー閉幕の一日前の7月30日のことであった。飯田館長および職員の方々の御好意に心から感謝する。

私たち、学会は、大学セミナー・ハウスと共に発展してきた。いや、源泉をここに求めてきたといってもよい。わが国の英語教育が一つの社会問題になっているこ

とは多くの人々の認識しているところである。その中でも、入試と絡んで、大学がかかえる英語教育問題は、わが国の国際的な発展に直接かかわる英語力の不足の面から考えても、どうしても改善の必要がある重要課題である。しかも、それは担当者の根強い「地の塩」運動によって次第に解決されていくものである。

大学英語教育学会が十五年前に設立されたのは、この主旨に基づいたのであり、この夏期セミナーも、その幅広い活動の一環として実施されている。セミナーは、この十年間一貫して、①米国より権威ある学者を招いて講義をうける、②英語の表現力を増すための訓練をうける、③参加者自身の大学英語教育についての問題点や研究を出しあい、論じあい、その結果としての英語教育改善に関する声明を発表することを中心に English Village 方式で行われてきた。

この十年間に招いた米国の学者は約三〇名に達し、参加者は約三百名になっている。この中から、JACETは、新しい若い血を導入し、太い幹をつくるに至った。たとえ、参加の時期は違っても、大学セミナー・ハウスという物的、精神的環境を一にしていることは、多くの人間が共感しあえるという人間讃歌の最大の基盤を与えられているということである。

(慶応義塾大学助教)

2 大学セミナー・ハウスと私——この11年を顧みて

ノートルダム清心女子大学 橋内 武

日本の大学が抱える問題は多いが、その大半は大学という社会の閉鎖的体質から来ているように思われる。学部学科制しかり、教授の人事しかり、入試制度しかり、学位審査しかりである。

そういう中で、大学セミナー・ハウスは、特異な存在として光っている。ここでは、国籍を問わない。所属を問わない。専攻を問わない。学年や年齢も問わない、単位を出さない大学である。むしろ様々な仕切りを突っ払うことによって、健康な知的邂逅の場を提供している。このことは、84回にの

ぼる大学共同セミナーに如実に反映されていると思う。

くしくも私と大学セミナー・ハウスのつながりは、一年前の開館記念セミナーに始まり、この度の第10回JACET(大学英語教育学会)夏期セミナーに至っている。この二つの記念すべきセミナーに参加できたことを誠に嬉しく思うと同時に、説明し難い縁(えにし)を感じる。

一年前、私はまだ学部の四年生であった。ここセミナー・ハウスで得た知的興奮は忘れ難いものであり、ある意味で今日私が社会

言語学を研究・教授する上での知的礎えをなしている。その後私は、このような若い健康な知性の出会いを大学院委託聴講制度の下に経験した。また、米国はイリノイ大学とミシガンにあって、異文化間コミュニケーションに占める言語の重要性を認識した。岡山のノートルダム清心女子大学に赴任してからは、JACETのセミナーに第4、第8、第10回と三度参加し、その都度全国の大学の英語教師と「同じ釜の飯を食った」、英米の学者と「Plain living, high thinking」の生活を送ったわけである。

思えば、セミナー・ハウスも開館当初は、本館と宿舎村(ユニットハウス群)と少数のセミナー室、それに風呂場のあるサービスタワーだけであった。開館式の日

昨年、今年と二年続けて大学セミナー・ハウスで計測自動制御学会の制御理論シンポジウムを開かせていただいた。このシンポジウムは今年で第5回を教え、参加者は回を重ねるにつれて増加し、今年は一〇〇名をこえるにいたった。一昨年末までは、街の中の会場で開いてきたのだが、時間にはばられる会場では、セッションが終ると参加者はちりぢりになってしまい、つっこんだ討論もできず、自由な話し合いも生れないまま会

には、野猿峠から泥まみれになって坂道を上りつめたものである。しかし、逆三角形の下の頂点を切り取ったような形の本館や丘に寄り沿うようにして建つ可愛い宿舎群など——これらの建築物は、誠にユニークな芸術作品として参会者の目を見張らせたものである。あれから一年。講堂、図書館、教師館等設備の拡充が進んだだけではない。多摩丘陵一帯の宅地化が進行する中で、セミナー・ハウスの丘だけは緑濃い森と化している。大東京の一角にあって、ここは小鳥さえする「自然保護地区」である。

学問、芸術、自然の三者が一体となったりベラリストの人間道場——これが私の理解する大学セミナー・ハウスである。

期を終ることになってしまっていた。どんな学問であれ、真剣な討論によって問題を掘りさげていくことの重要さは変らない。また学問も、所詮人が産み出していくものであれば、互いに人を知ることが結局は学問の進展の基礎となる。なんとかして時間に制約されず、気の済むまで討論を続けることができ、またいたるところで自由な接触、話し合いのできる状態でシンポジウムを運営したいというのが、私達運営委員の願いであ

3 精神的環境を求めて

早稲田大学教授 示村悦二郎

った。

それには、参加者全員が寝起きを共にし、二四時間のつきあいをすることがまず必要である。どうすればそのようなシンポジウムが開けるか。運営委員会で一年以上もこの課題の答を模索し続けた。条件はなかなか難しかった。第一に、学問の場にふさわしい環境でなくてはならない。泊るだけならばホテルでも民宿でもよいわけだが、やはりひとつピンと張りつめた空気が欲しかった。そのうえ夜は昼間の疲れを解きほぐし、あちこちに自由な語らいの輪が作れるところではなくてはならない。時には多少のアルコールも必要であろう。全員が集まれる大きな会場と同時に、小グループで分科会を開く会場もいくつか必要だ等々。

いくつかの候補が浮んでは消えた。そして最後に残ったのが大学セミナー・ハウスであった。静かな自然環境の中で対話と心の触れ合いを通して真理を追い求める若者の集う大学セミナー・ハウスこそ、われわれのシンポジウムの会場として最もふさわしい精神的環境を与えてくれることは疑いもなかった。勿論、会場等の施設も申し分ない。会場が決ってからの準備については、われわれにとっては初めての試みであったにも拘わらず、経験豊かなセミナー・ハウスの担当者の適切な助言を得て何の不安もなかった。

全国から一〇〇名をこえる研究

者が集った数日間、こんなに熱気に包まれた学会をこれまで経験しただろうか。誰もが一つの目的に向ってすべてを注ぎこんだ。討論はしばしば芝生の上へ、あるいは食堂へと持ちこまれ、ついにはビールの泡と共に深夜もつれこむことがしばしばであった。さまざまな接触の輪がつけられていった。対話が生まれた。

実は当初、ひとつだけ心配していたことがあった。それは宿舎が大部分、若者向けに簡素に作られ

4 第1回移動大学八王子ゼミの開催にあたって

プロジェクト・リーダー 米山喜久治

川喜田二郎をリーダーとする移動大学は、次のような八つの目標を掲げて一九六九年8月信州黒姫高原でスタートを切った。

- (一)創造性開発と人間性開放、(二)相互研鑽、(三)教育即研究、研究即教育、(四)頭から手までの全人教育、(五)異質の交流、(六)生涯教育、生涯研究、(七)地平線を開拓せよ、(八)雲と水と。

以来北は北海道から南は沖縄まで日本列島を教科書にして13余回のセッション、今年も7月から8月にかけて石川県で能登セッションの開催が予定されている。第1回以降移動大学は文明の未熟な驕りを捨てて大自然の中にチームワークを基盤にした二週間のテント生活方式による知的共同社会を形成してきた。学歴社会再生産の下請機関になっている都市の大学を

ていて、年輩の方々には不便ではないかということであった。しかし、これは全くの取越し苦労であった。そんな形の上の不便は取るに足らないものだと思わせる何かが、セミナー・ハウスにはあった。来年も第6回のシンポジウムを同じくセミナー・ハウスで開かせていただくことになっている。八王子で会いましょうを別れの言葉に散っていく参加者を見送って、確かな手応えに心を満たすことができたことを感謝している。

去って十八歳以上の健康な者なら誰もが参画できる知的共同社会の建設が目標とされた。異質の交流の中に相互研鑽によって教える者教えられる者の両極分解を避けて生きた学問・研究が追求された。方法論はKJ法を軸にした野外科学的アプローチである。

顧みると移動大学は六九年2月のセミナー・ハウスでの東工大研究会主催の大学問題研究会に端を発している。七年の歳月を経て再び母港セミナー・ハウスに礎をおく。所以はツアラトウストラが山をおりて街に出たのと同じように、移動大学は都市の固定施設を使って自らの新しいシステムの可能性を探検することにある。セミナー・ハウスとの結合が日本の知的空間に新たな一石を投ずるものと確信する。(明治学院大学専任講師)

●業務通信

7月、当初、昨年について再び最多利用者(五、八七二人)が見込まれていたが、いくつかのグループに申込人数を大幅に下廻る利用者の減少が見られたため、結局、五、四九二人にとどまった。しかし、ゼミ実施回数は一〇九回となり、これは開館以来の新記録となった。

☆交歓会

6月26日、立大・香原志勢、学習院大・江沢洋、移動大学・川喜田二郎の三先生のスピーチが行われた。参加者は9グループ、一七三名。7月9日、立大・斎藤真先生のスピーチと東京学芸大有志のギターと歌で楽しく交歓。参加者は9グループ、一七八名。

7月中旬に在泊された神奈川大学の堀野ゼミ(人間工学)から館長に、「背中などの部分にも届きます」という新案の「まごの手」が贈られた。従来のもものでは、どうしても手の届かない部分が残るということで、同ゼミのメンバーの一人が、人間工学的に考案したものだそう、その研究のレポートも添えられていた。まことに「かゆいところに手が届く」ような若者からの暖い贈物であった。

* * *

最も望ましい典型的なゼミナール・ハウス向きの共同研究グループがある。それは東京経済大学色川大吉教授、上智大学鶴見和子教授などをつくっている「近代化論再検討研究会」である。6月10・11の両日にこの歓迎すべき学者達一三人が教師館サロンに陣どって、深夜に及ぶ熱心な討議を行っていた。この部屋は学者向きの別天地で、夜にはアルコールが許される。疲れた頭脳を休ませるよう

◆第10回会員校事務連絡会

二八大学から三八名が出席し、

会員校の連帯を深め、相互の親睦をはかる

昭和51年7月9日

新たに協力会員校になられた東海大学、東京農業大学、鶴見大学の三校の歓迎も含めて開かれた連絡会には、二八大学から三八名が出席した。

プログラムは施設見学、歓迎昼食会、遠来荘での記念撮影について午後二時より大学院セミナー館を会場に協議会がもたれた。

海老沢事務局長の司会で、まず会員校毎に出席者の自己紹介があり、飯田館長の挨拶と全体報告につづいて企画室、庶務、業務、会計の各課長より現況報告が行われ、参加者からの質問、要望を含む全体の話し合いに移った。

△主な協議内容▽

・新入生オリエンテーションなど全館使用の場合、トイレの数が少ないので将来の建築計画で考慮

にとの配慮からである。一九七四年に出版された「思想の冒険―社会と変化の新しいパラダイム」はこのサロンの産物である。今回の共同討議は8月に水俣に調査に行く「不知火海総合学術調査団」の準備のためであった。「ミナマタの業苦は、まだ終わっていない」といわれるとき、炎天下の不知火海にでかける調査の結果に注目したい。

してほしい。
・当ハウス施設利用の際の学生に支給する大学の補助の状況。
・各大学が独自に所有している研修施設と当ハウスの位置づけ。
・大学教員懇談会の参加者の範囲を一般の職員にまで広げてほしい。

◆会員校事務担当者名簿

- 青山学院大学(学生部厚生課) 課長 生瀬 良造
大妻女子大学(学生部学生課) 課長 大妻 市三
お茶の水女子大学(学生部厚生課) 課長 関 宗正
学習院大学(学生課) 課長 中村 義明
神奈川大学(総務部) 部長 島田 満潮
共立女子大学(学生部学生生活課) 課長 平岡 之長

- 慶応義塾大学(文書部庶務課) 課長 岩野 節夫
工学院大学(教務部) 部長 平川 紀一
国際基督教大学(学生事務課) 池田 篤
駒沢大学(総務部) 部長 堀口 英一
順天堂大学(学生部学生課) 部長 上西 守夫
上智大学(学生部学生生活課) 部長 森田 博子
芝浦工業大学(大学事務部) 部長 松繩 孝
成蹊大学(大学事務部庶務課) 部長 横山 博
成城大学(学生部学生課) 課長 島野 黎行
聖心女子大学(庶務課) 課長 補佐 新井 文夫
専修大学(学生部厚生部) 課長 高坂 村男
千葉商科大学(庶務課) 課長 富田 嘉明
中央大学(学事部) 次長 田上 愛之
津田塾大学(学生生活課) 課長 寺出 澄子
電気通信大学(学生課) 学生係員 川本 忠
東京大学(学生部学生課) 課長 補佐 梶原 寅雄
東洋大学(学生部) 課長 北川 静雄
東京医科歯科大学(学生部学生課) 学生掛長 栗林 恒雄
東京学芸大学(学生課) 課長 黒川喜八郎
東京外国語大学(教務課) 係長 加藤 賢治
東京家政大学(学生部学生課) 課長 平沢 尚孝
東京家政学院大学(学生部教務課) 課長 補佐 松崎 三次
東京教育大学(学生部学生課) 係長 生田 進
東京経済大学(総務部) 部長 中村 道岡
東京工業大学(教務部教務課) 課長 川代 重富
東京慈恵会医科大学(進学課程) 事務長 伊藤 勝
東京女子大学(学生課) 課長 井上 裕子
東京都立大学(学生部学生課) 教務第一係 平井 武夫
東京農工大学(庶務部) 部長 吉田 雄一
東京理科大学(庶務課) 課長 佐藤 三郎
東京農業大学(学生部学生課) 課長 補佐 細川 繁一
東海大学(教務部) 事務室長 上野 征勇
鶴見大学 副学監 角家 文雄
日本大学(学生部) 部長 田口 三郎
日本女子大学(学務部学事課) 課長 岩田鶴之助
法政大学(学生部厚生課) 課長 秋本 昭男
武蔵大学(学生部学生生活課) 課長 真島 克
武蔵工業大学(教務部) 部長 堀内 永学
一橋大学(庶務課) 部長 八巻 滋
明治大学(教務課) 課長 平田 興次
明治学院大学(総務部総務課) 課長 箕輪 潔
横浜国立大学(学生部) 部長 久保村隆祐
立教大学(学生部学生生活課) 副部長 武田 恭一
早稲田大学(学生会館事務所) 林 宏幸

◎館長日記から

昨年職員の手で移植してもらった「いろは坂」の宮城野の萩が咲き始め、初秋の訪れを知らせてくれた。萩の花が向側の遠来荘のかやぶき屋根とよく調和し、この周辺に古い田舎の風景を復元している。もの静かな余裕が遠来荘の茶室につづいている。◆8月3日、

山内恭彦先生をお見舞いする。遠来荘の床の間に掛けたご寄贈の掛軸李白観瀑図が素晴らしい。お茶会の雰囲気一段とひきたてて下さったことを報告し、ご好意に心からお礼を申し上げた。思わず長居をし、博学多識の老博士から沢山の知識を頂いた。◆8月6日の朝8時、教師館屋上に志ある者が多数集まり、広島原爆を記念し平和祈願の黙禱を捧げた。このとき真理の鐘をついて下さったのは、二歳のとき広島原爆にあわれた広島市立袋町小学校教師脇田充子氏と東大物理工科大学院生内藤芳夫君である。◆職員達の慰労のため7月26日と8月26日、午後の食堂で納涼パーティを催した。盛夏のシーズンは、利用者の多い忙しいときである。◆今日から明日へかけてのセミナー・ハウスの方向を深めることに、私は全智を傾けている。本日にセミナー・ハウスの目的を理解して下さる方々の才能から私は啓示をうけることが多い。前共同セミナー委員長木村尚三郎氏は前号で明日に生きる大学

セミナー・ハウスの在り方を、そして本号では東大教授久保正彰氏が高等教育に余裕を与えるような方向づけを提言されている。肝に銘ずるおことばである。◆お手紙をいただき、ご返事を書くこと、それがいまの私にとって、生きるこの意味であるといってもよい。この7月末で筑波大学長をご

退任された三輪知雄先生の近況に接した。ご苦労だった創設の任務を終えて鎌倉のお宅で休養されているとのこと。七三歳で初代学長に就任し、二年九ヶ月の献身であった。当ハウス創設当時、いく度かこの丘に来て下さった老先生なれば折を得て今日の姿を見ていただきたい。◆数ある千人会の入会申込書の中にワシントンからの航空便があった。わが国の水産業を根底からゆさぶっている二百カイル水域の問題で、日米交渉にでかけておられる外務省条約課長大和田恒氏のものである。難交渉で難航しているであろうに、千人会の申込書を送って下さる大和田氏の好意の中に私はフィランソロピの精神を拝察するのである。知識ある人々の善意と連帯意識がこれからの日本社会に新しい道義をつくるであろう。◆萩が咲き、樹木が緑になっただけでは高尚な静けさは生まれない。考える人々が集うから自然を静かにし、美しくするのである。

●利用状況

* 同月2回利用

6月11、13、17、20、23、27、30日
7月11、15、19、22、26日

早稲田大学教授	西宮 輝明	山中惣之助	電気通信大学教授	東京大学茅ゼミナール	明治大学教授	立教大学教授	東京都立大学助教授	東京都立大学助教授	東京都立大学助教授	東京都立大学助教授	慶応義塾大学助教授	学習院大学助教授	東京大学助教授	東京大学助教授	法政大学助教授	東京学芸大学助教授	早稲田大学助教授	一橋大学助教授	東京工業大学助教授	東京都立大学助教授	慶応義塾大学助教授	中央大学教授	東洋理科大学助教授	東京理科大学助教授	東京学芸大学助教授	神奈川大学講師	法政大学講師	青山学院大学教授																										
小谷 達男	小田中聰樹	兼子 仁	市川 深	関田 寛雄	三寶 義照	村井 実	児玉 久雄	梅沢 豊	鈴木甚五郎	安良岡康作	清水 望	長島 信弘	松田 武彦	佐野 博敏	鳥居 泰彦	岩尾 裕純	呉 主恵	富沢 稔	近藤 充夫	吉沢 法生	松野 光信	佐藤 和男	玉野井昌夫	大川 章哉	二村 敏子	岸 英朗	竹内与之助	佐藤 栄一	香原 志勢	桐敷真次郎	木名瀬信也	小田 莊一	小林 好作	高橋 康子	北 彰	日本学生ゼミナール東京部会	第84回大学共同セミナー	四大学(中大・慶大・早大・一橋大)経済学部連合ゼミナール	日本ネパール協会	応用物理学会	東京八王子西ロータリークラブ	日本聖書協会訳語部	東京都公立保育研究会園長部会	中央協同組合学園	大正海上火災	パロース	小西六写真工業日野工場*	伊勢丹労働組合	コミックス研究会*	日本電気	【個人利用】	カウンセラー	麗沢大学講師	山敷繁次郎

拝啓 わたくし個人としても、またわたくしたちの日本ワイルド協会としても、はじめてのお近づきでありましたにもかかわらず、講堂や居室の使用についてお取計らいくださいました寛容な御親切、また食事時のこまやかなお心づかい、そして、お別れのさいにかわされました力強い握手など、すべてがああ施設の使命に徹しきられた意志と見識の士のあらわれと、深い感動を覚えずにはいられません。とりあえず御礼まで。

七月五日 西村 孝次
(日本ワイルド協会会長、明治大学教授 西村孝次氏から館長に宛てられた書簡より)

◇7月

芝浦工業大学教授	十代田知三	一橋大学教授	法政大学講師	東京都立大学助教授	東京都立大学助教授	東京都立大学助教授	千葉商科大学助教授	明治学院大学助教授	明治学院大学助教授	専修大学助教授	工学院大学助教授	横浜国立大学助教授	東京大学助教授	明治学院大学助教授	千葉商科大学助教授	中央大学教授	お茶の水女子大学理・家政学部
大川 政三	公文 溥	高田 清朗	菊地 昌典	秀雄	吉原 功	柘植 敏治	横山 正明	伊倉 退蔵	高橋 徹	増田 茂樹	野村 隆夫	那須 宗一					

新入生セミナー
 お茶の水女子大学文教育学部
 新入生セミナー
 東京学芸大学講師 亀森 俊正
 お茶の水女子大学助教
 小川 剛

聖心女子大学教授 島田 一男
 東京大学教授 齋藤 真
 学習院大学教授 齋賀 久敬
 東京都立大学事務職員研修
 東京経済大学教授 色川 大吉
 早稲田大学教授 信貴 辰喜
 早稲田大学教授 藤原 保信
 学習院大学教授 堀分 一弘
 神奈川大学助教 志水 英樹
 神奈川大学助教 堀野 定雄
 芝浦工業大学教授 石黒 哲郎
 神奈川大学助教 北岡 正敏
 東京大学教授 小林 直樹
 東京都立大学教授 佐藤 英男
 早稲田大学助教 戸沼 幸市
 東京都立大学教授 東 洋一
 東京都立大学助教 堀川 浩南
 東京理科大学教授 大沢綱一郎

慶応義塾大学教授
 中央大学教授
 武蔵大学教授
 東京大学教授
 早稲田大学助教
 東京経済大学教授
 東京工業大学助教
 千葉商科大学事務職員研修会
 東京家政大学助教
 大妻女子大学教授
 中央大学教授

中央大学教授 慶応義塾大学教授
 武蔵大学教授 中央大学教授
 東京大学教授 武蔵大学教授
 早稲田大学助教 早稲田大学助教
 東京経済大学教授 東京経済大学教授
 東京工業大学助教 東京工業大学助教
 千葉商科大学事務職員研修会
 東京家政大学助教 東京家政大学助教
 大妻女子大学教授 大妻女子大学教授
 中央大学教授 中央大学教授
 神奈川大学助教 神奈川大学助教
 東京経済大学教授 東京経済大学教授
 東京学芸大学教授 東京学芸大学教授
 法政大学講師 法政大学講師
 東京外国語大学教授 東京外国語大学教授
 中央大学助教 中央大学助教
 東京都立大学助教 東京都立大学助教
 東京大学助教 東京大学助教
 東京学芸大学教授 東京学芸大学教授
 竹内与之助 竹内与之助
 飯田 浩三 飯田 浩三
 桐谷 維 桐谷 維
 和田 英一 和田 英一
 和治大学助手 和治大学助手
 芝浦工業大学教授 芝浦工業大学教授
 東京工業大学助手 東京工業大学助手
 日本ワイルド協会 日本ワイルド協会
 肥後 和夫 肥後 和夫
 創価大学講師 創価大学講師

深海 博明
 三橋 文明
 村田 晴夫
 関 忠
 鈴木 慎一
 長島 文道
 野田 淳彦
 橋口 英俊
 隈部 直光
 永井善次郎
 柳沢 治
 三浦 孝司
 箸方 幹逸
 田之頭安彦
 盛田 常夫
 早稲田大学教授
 東京学芸大学教授
 早稲田大学教授
 東京学芸大学助教
 星野安三郎
 鹿島 次郎
 神原雄太郎
 市川 惇信
 中村 幸安
 十代田知三
 近江 政雄

早稲田大学教授
 立教大学教授
 武蔵工業大学教授
 武蔵工業大学助教
 明治大学教授
 日本女子大学助教
 青山学院大学助教
 上智大学講師
 東洋大学講師
 日本大学講師
 武蔵大学教授
 明治学院大学教授
 早稲田大学教授
 青山学院大学教授
 東京都立大学助教
 東京学芸大学教授
 早稲田大学教授
 東京学芸大学助教
 星野安三郎
 鹿島 次郎
 神原雄太郎
 市川 惇信
 中村 幸安
 十代田知三
 近江 政雄

高島 平蔵
 三戸 公
 井上 忠夫
 安味 真正
 三上富三郎
 志賀 英
 関田 寛雄
 笠 耐
 大野 正男
 服部 伊人
 横山 定雄
 山本 普
 川原 栄峰
 原 豊
 田辺 良美
 星野安三郎
 鹿島 次郎
 神原雄太郎
 市川 惇信
 中村 幸安
 十代田知三
 近江 政雄

高島 平蔵
 三戸 公
 井上 忠夫
 安味 真正
 三上富三郎
 志賀 英
 関田 寛雄
 笠 耐
 大野 正男
 服部 伊人
 横山 定雄
 山本 普
 川原 栄峰
 原 豊
 田辺 良美
 星野安三郎
 鹿島 次郎
 神原雄太郎
 市川 惇信
 中村 幸安
 十代田知三
 近江 政雄

桑沢デザイン研究所
 都留文科大助教
 独協大学教授
 東京YWCA学院秘書養成科
 独協大学教授
 富士短期大学講師
 共立女子短期大教授
 日本女子体育大助教
 八大学合同セミナー
 日本国際医学生連盟
 害人口問題会議
 大学連合後藤ゼミ
 日本工業技術連盟
 日本キリスト教団富士見町教会
 日本OR学会
 東京電力東電学園大学部
 大学英語教育学会夏期セミナー
 国際経済商学学生協会
 国際セミナー
 国際語学センター
 多摩三菱ふそう自動車販売*
 日野協力会

高島 平蔵
 三戸 公
 井上 忠夫
 安味 真正
 三上富三郎
 志賀 英
 関田 寛雄
 笠 耐
 大野 正男
 服部 伊人
 横山 定雄
 山本 普
 川原 栄峰
 原 豊
 田辺 良美
 星野安三郎
 鹿島 次郎
 神原雄太郎
 市川 惇信
 中村 幸安
 十代田知三
 近江 政雄

立川スプリング
 トワール・システイ東京
 日本化薬
 東京青年会議所
 松下電器東京分会
 【個人利用】
 芝浦工業大学教授
 学習院大学教授
 東洋大学短期大教授
 テキサス大学教授
 一橋大学助手

立川スプリング
 トワール・システイ東京
 日本化薬
 東京青年会議所
 松下電器東京分会
 【個人利用】
 芝浦工業大学教授
 学習院大学教授
 東洋大学短期大教授
 テキサス大学教授
 一橋大学助手

編集後記

この夏には、利用者の方々のなつかしい再会をいくつも経験したが、その中から四人の方々にご協力いただき編集したが、8、9頁の「四人の証言」である。小さな試みではあるけれど、こうした地道な活動が日本の大学を支えている、ということ、改めて確認することができた。(能)

燎原のこえ

色川大吉

民衆史の起点／近代日本の問題を考え続け、人とその思想を問い、文明を考え、いままた不知火海の学術総合調査に専心する著者が、戦後の自分史を明らかにしつつ、民衆史の起点の形成を描く注目の書。初期評論から最新の評論まで収録する。
 1400円

思想の冒険

鶴見和子・市井三郎編

社会と変化の新しいパラダイム／日本、中国、ソ連を中心に、社会構造、政治過程、科学技術、宗教、価値観などの諸側面、どのように伝統の組みかえが行なわれたかを実証的に研究し、新しい社会変動の理論的枠組の構築をめざした画期的な共同研究。
 1900円

混沌の海へ

山田慶児

中国的思考の構造／中国における伝統思想と現代思想の連関を究明する著者の論文集。社会変動論をも包摂する「極構造理論」を提示し、思想・科学・技術などの諸分野で伝統の革新的な再生を試みて独自の体系をめざす中国の思考構造を探る。
 1400円

筑摩書房
 東京神田小川町2